昭和の文化に對應し得るや

樋口吾笑

淨瑠璃の實力

淨瑠璃人の覺悟

六字南無右衛門の昔は暫く措き、吾等が弱冠帝都に遊べる頃、三府女義大夫の顔付を見た記憶を呼起すと、中軸に竹本綾之助あり、其の下に竹本小清、竹本東玉、大關に竹本小住竹本小政以下四十餘名が並んで居た。大阪の竹本長廣、豊竹呂昇等の名前なきは三府とは云ひ乍ら東京を首位としたる故か或は長廣呂昇等が未だ其の名を賣廣めざる以前の撰に由るか、それは兎も角、吾等の知り得る限りに於て綾之助、呂昇長廣を知らざれば女義の事共に語るに足らずと拋擲される程鳴り響きたる女義の王侯なりき。

それ程廣く名前は賣れ、譽高かりし綾之助、長廣、呂昇の外に如何なる名人大家ありしか。東京と云はず、大阪と云はず今日は全國到る所の女義大夫の定席は跡形もなく潰滅無慙の最期を遂げた。又文樂近松と對立を誇つた其の一方近松座が崩潰して再起するの力なく。文樂獨舞臺となつては俄に寂寥を感じ淨瑠璃の前途は彌々危まざるを得なかつたが。文樂人の感想や如何。恐らく文樂獨舞臺で鼻高々と喜んだであらうが裏口に滔々たるは淨瑠璃落潮の警報と知らざるあさましさは遂に突然回祿の災に襲はれ、道頓堀の辨天座に據つた。久しからずして元の近松座を買收して茲に移つた文樂座は順調の進出とは云へない。が文樂なればこそ此の繼續が出來たのである。

斯の形勢を見て悲憤慷慨切齒扼腕奮然起つて同志を糾合し因會と協商談合を遂げ日本因會女子部の蹶起を促し一方ならぬ苦心の結果、漸く創設されたのが女子部の研究會である、其の采配とつて指揮する者は豊竹呂昇であつた。爾來毎月各會員が研究鍛錬したる作品を公演し、大家博識の講評を乞ひ故きを温ねて新境を開拓し以て再興に驀進せんと計畫なつて著手せしが、事志と違ひ研究、講評思ひも寄らず、無用の長談議、侮辱、嘲弄、遺恨の復讐、誹毀中傷と曲解され、藝術の修養鍛錬は思ひも寄らず、批評も講釋もなく遂に出演者さへ影を潜むるに至り、剩へ肝腎膽煎役の呂昇は逝き全く采配を失つた。國家的藝術的奉公と自己滿足の道樂とは斯くの如く乖離するのであつた。是に於て斯道の愛護者たる江崎忠政氏を會長に頂き眞實修養練習に丹念するを誓ひたるも。例の批評講釋は畢竟有名無實に終り、種々の蜚語、流説と紛淆錯

綜して遂に懇情親密、和かなる間に溝渠を築きて相對するに至りたるが如き殆んど筆にするに忍びざる狀態となつた。皆これ無修養、私鬪の餘り公私を混淆し滅私報公てふ至誠盡瘁の道を踏み迷へる結果に外ならず、此の醜態の泉源は藝術に無關係なる別種の後援者より流出する私利私慾にして邪惡恐るべき私情の災ひで唾棄すべきである。苟くも淨瑠璃義大夫節が國民思想昂揚のため風俗改善のため必要とするならば須く第一銀行と三井銀行が合同したる如く、大乘的觀點より乘出すべきである。大東亞建設の世界的大波瀾に對處すべき重大時機に際會し乍ら時運に反航する者は亡び、これに良く對應合流する者は世界の指導者たる所以を解せずんば寶の山に入り手を空うして出づると齊しいであらう。此の順逆成敗の途を迷はず一意突進する勇者は千載の下、淨瑠璃史上に輝かん。淨瑠璃人の覺悟果して如何。

越路、春子、土佐、駒等相ついで逝き新星更に顯れず、女義呂昇、東廣、綾之助歿し、義大夫界の衰運は恰かも夕陽西海に春くの觀なきにあらず。古今の名人を凌駕せんとする日本因協會會長にして文樂座の櫓下、二世豐竹古靱大夫の今後斯道に對する感想や如何。

古靱大夫自身の藝は萬人に秀で一世の亀鑑となりても其の門弟の藝能如何、其の引率する部下の技倆如何は直に淨瑠璃の盛衰、世界藝術界に於ける斯道の勝敗に密接なる關係を有す故に其の奬勵に鞭韃に世界の潮流に後れざる樣、心掛けざるべからず。

時たま〳〵幸か不幸か斯る絕大なる責任！昭和聖代の文化藝術の興亡浮沈を決する役目が、名譽ある吾が豐竹古靱大夫に課せられてある。因會員は擧つて私を去り公に就き此の大責任を遂行すべき事を昭和十八年の初頭に勸告するものなり

轉居御通知

大阪市住吉區天下茶屋
三丁目十三番地

竹本織大夫

電話天下茶屋四三八〇番